

---

# 視力検査だよ!!全員集合オオ!!!

小豆久遠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

視力検査だよ！！全員集合オオ！！！！

### 【Nコード】

N1084L

### 【作者名】

小豆久遠

### 【あらすじ】

ある日銀魂高校の3年Z組で視力検査を行う事になった

問題児だらけのZ組、一体どんな視力検査になってしまうのだろうか…！？

## プロローグ（前書き）

初めまして!!

初投稿なわけですが…

本当に初めてなので文もぐぐぐだだと思えます!!

こんな駄文でも楽しんでいただけたら嬉しいです!

さて、今回の舞台は銀魂高校3年Z組です。

私も未熟者なので登場人物の性格などが、うまく表現できてないかもしれません。

そのときはすいません

誤字、脱字等は温かい目で見守ってやって下さい。

## ブローグ

視力検査とは、小・中・高の新学期に行われる目からどれほどの威力のビームが出るかを測る検査である。

嘘である。

目がどれくらい見えるかを測る検査である。

銀魂高校でもそんな検査が行われる事になったのだ。

「はい、つーわけで今日のロン毛ホームアローンは視力検査を行う。」

教壇に両手を着いた3年Z組担任、坂田銀八がいつものように気だるそうな声で言った。

「えー、じゃあ適当に順番決めて1人ずつそこに立て。それ以外は自習な」

視力検査か…

志村新八はため息をついた

このクラスでそんな事をやるなんて絶対何か起こるに決まっている。

この後の事態を想像して、新八は再びため息をつくのだった。

「はい先生!!」

と挙手して元気に立ち上がったのは神楽だ。

「しりよくけんさって何ですか？意味がよくわかりません」

「あー…視力検査ってのはだな…」

説明すんのめんどくせーから、この話の1行目から4行目を読んで  
こい」

「はい」

神楽は返事をして、席に着いた。

「いや、アンタ小説を何だと思ってんですか！しかも1行目から4  
行目って全部ハツタリでしょ!!」

新八はすかさず銀八に突っ込んだ。

「うるせーな。いいんだよ、便利だから」

「よくねーよ!!神楽ちゃんが信じちゃったらどーすんですか!!  
!?!」

「先生…私パピーに二十歳になるまでビーム禁止って言われてるアル」

神楽が申し訳なさそうに言った。

「ほら信じちゃったよ！！てゆうか神楽ちゃんビーム出せるの！！！！」

「新ちゃん、人間その気になればなんでもできるのよ」

新八の姉、志村妙が弟を諭すように言う。

「いくらなんでもビームは無理でしょ！！もはや人間じゃないですよそれ！！」

「もしかして新八ビームできないアルか？ぶぶっダッセー」

「ここに居る皆できねーよ！！っーかプロローグからこんな調子で視力検査やっていけるんですか！！??？」

「そうですよ皆さん」

後ろの席から声があがった

屁怒呂くんだ

「真面目にやりましょう、真面目に」

「は……はい……」

今日初めてZ組が静かになった瞬間だった。

その後新八が視力検査の意味を神楽に説明して、ようやく検査開始になったのだった。

## プロローグ（後書き）

どうでしたか!?

この小説を読んで頭痛や吐き気をもよおさなかった方は神に等しい存在です!!

もちろん話は続くので、気に入ってくれた方はまた読んでやって下さい。

アドバイス、感想等お待ちしております。



## 第1検査 志村新八（前書き）

遅れました、第2話です。

今のところ登場人物は少ないですが、なるべく全員書けたらと思っています。

## 第1検査 志村新八

「はい一人目、そこに立て」

黒板に視力検査の時に使う大小様々な、ひらがなとかカタカナとか色んな向きの”C”が書かれた紙を貼り、床に貼られたテープをさして銀八が言った。

「じゃあ、僕が行きますね」

新八が席を立った。

「新ちゃん頑張つて！」と妙から声援があがる。

「…つと」

新八はテープの位置にたつと、眼鏡を外して空いている席に置いた。

（視力検査の時つて裸眼と矯正の両方をやるんだよね…）

そのまま”黒いしゃもじみたいなアレ”で左目を隠した。

「んじゃ行くぞぱつあん。これは？」

銀八が指したのはひらがなの”ぬ”新八の裸眼でもかろうじて見える大きさだ。

「えつと…ぬ…ですか…？」

「バカ、オメーにきいてねえよ」

「えっ？じゃあ誰に…」

「俺は眼鏡（新八）に聞いてんの！！…ったく」

新八は持っていた”黒いしゃもじみたいなアレ”を床に投げ付けた。

「…ったく”じゃねエエエ！眼鏡が答えるわけねえだろーが！！  
それから眼鏡と書いて新八と読ませるのもやめろ！！！！」

「うるさいアル。眼鏡掛け機のぶんざいで！！」

「誰が眼鏡掛け機だ！！そっちが眼鏡！僕が本体でしょ！！」

「あ？眼鏡掛け機が新八で、眼鏡が僕？…なんかややこしいな」

銀八はめんどくさそうに頭を搔く。

「いい加減眼鏡掛け機から離れるオオオ！！別にややこしくないし、それじゃあどっちも僕じゃないですか！！」

「新ちゃん、どうしたの？ちゃんと答えなきゃダメでしょ」

と、妙が眼鏡（新八）にエールを送る。

「あ、姉上まで…」

「この際どっちでもよくな？あっちも新八こっちも新八み〜んな新

八で

「よくねーよ！……もういいです、どうぞ僕裸眼は両方Cなんで

新八はため息をついて眼鏡をかけた。

「よし、氣取り直していけよ。これは？」

「上」

「これ」

「右……です」

……

……

……

「おし、両方1・0でAだな。新八終了、それ消毒して次の奴に渡せ」

「今の”……”何ですか？すごい気になるんですけど」

「何ですかって、そりゃあオメーアレだよ。省略してあんだよ」

「いや、省略する意味がわかんないんですけど。」

「だっつてずっと会話だけのやり取りが続くんだよ？読者の皆様が飽きちまうだろーが」

新八はそれでいいのか？と思ったが、これ以上突っ込むといつまで経っても視力検査が進まないので黙っておくことにした。

「次は誰がやりますか？」

”黒いしゃもじみたいなアレ”を消毒して、新八はクラスメイトに聞いた。

**第1検査 志村新八（後書き）**

いかがでしたか？

ちなみに矯正というのは眼鏡やコンタクトレンズのことだそうです。

アドバイス、感想等お待ちしています。

## 第2検査 神楽

「次は誰がやりますか？」

「はいはい！！私がいくアル！！！」

手をあげたのは神楽だ。

「神楽ちゃん…大丈夫なの？」

ついさっきまで視力検査を知らなかった神楽が自信満々に手をあげたので、新八は少し心配になる。

「全然大丈夫ネ！！」

神楽は眼鏡を外すと、張り切って立った。

黒板の真ん前に。

「おい、全然大丈夫じゃないんだけど！お前は新八のを見てなかったのか？」

「そうだぞリーダー、ここに立つんだ」

印の位置に最も近い桂がそこを指して言った。

「でも先生、私の国ではここからやってたアルよ？」

「やっぱり帰れば？国に。っーか帰ってくれよ」

「その前に神楽ちゃん、視力検査知らないんじゃないの？」

新八は気になった事をきいてみた。

「私の国では視力検査じゃないネ。名前が違うアル」

「名前エ？」

「そう、私の国では”デッドオアライフ 眼球試験”だったアル」

「なんだよ”デッドオアライフ”って！なんで視力検査に命がかかってんだよー！！」

黒板とキスしそうなほど近づいている神楽に銀八は突っ込んだ。

「なんか横文字があつたほうがカッコいいネ。」

「それだけの理由！？てかそれ自分で作ったよね？今考えたよね？」

「そんなんじゃないヨー！！私の国のれっきとした…」

「あーもういい、もういいから！早くそのテープのところに立てー！！」



銀八はうるさいというように指を耳に入れて言った。

「そっだぜいチャイナ、次待ってんだよ！……土方さんが」

「俺かよ！！」

沖田くんの言葉に土方くんが本から顔を上げてつつこんだ。

「ちえっ、しょうがないアルな……」

やっこの思いで行われた神楽の検査結果は、裸眼Aだった。

「……いや、眼鏡いらなくね？」

## 第2検査 神楽（後書き）

ゴールデンウィークですね

最大11連休とかいってますが私は5連休ですorz

いかがでしたか？

アドバイス、感想等お待ちしています。

第3検査 土方十四郎（前書き）

放置プレイもいいところですねwww

更新が遅くなっちゃってしまいすみませんm（）（）m

相変わらずggggggですが…

どうぞー！！

### 第3検査 土方十四郎

「さ、土方さんようやく順番ですぜ」

「だから何で俺なんだよ！お前が行け総悟！！」

「あらあら、怖いんですかい？？情けねーや」

「んだとコラ！！！！」

額に血管を浮き上がらせた土方は勢いよく立ち上がる。

「おつマヨ方、次いくか？」

それを見た銀八が土方に言った。

「いや、ちがつ」

「さすが副委員長！！」

「頑張れよトシ！！」

教室の風紀委員メンバーが盛り上がり、行くしかない雰囲気になってしまった。

戸惑う土方を見た沖田は一人ニヤリと笑っていた。

「総悟…テメエ後で覚えとけよ…」

土方は沖田に言うのと席を立ってテープの位置に立った。

「はい、じゃあ左目隠して。こっち見て」

黒板の前に立ちそう言ったのはなぜか沖田だ。

「総悟…？テメエ何やってんだ？」

「見ての通り視力検査でさあ。大丈夫、ちゃんと許可はとりやしたから。ね、先生」

沖田が目をやった先には、椅子に座ってジャンプを読んでいる銀八が…。

「あ、うん。なんかやってくれるって言ってたから、偉いよ？総一郎くん」

「お前は仕事をしろオオ！」

「あゝはいはい、文句はいいからさっさと検査しろや」

銀八はジャンプに目を向けたまま土方に言った。

「そうですね土方さん、まだ二人しか終わってねーんですから。」

「チツ…わかったよ」

土方は渋々左目を隠した。

「じゃあ俺が適当に指しますんで、答えて下せエ」

「おお」

「はい、「コレ」

沖田は棒で文字を指していき、それに合わせて土方が答えていく。

「えー…”し””ネ””ヒ””じ””か””タ”…って何言わせてんだテメエ！！！」

「さすが土方さん、1・0のAでさあ」

「ちっとも嬉しくねーよ！！！！もう気は済んだろ、代われ！」

「さ、次は左ですぜ。」

土方の言葉を見殺して沖田は次の検査に移ろうとしている。

「代われやアアア！！！」

「トシ、どうした？何が不満なんだ？」

近藤が土方に困ったようにきいた。

「不満だらけだよ！近藤さんもなんとか言ってくれ」

「仕方がないな…総悟！あまりトシを困らせるなよ」

「へい、大丈夫でさあ。次はちゃんと”マヨネーズ”って言わせてあげますから」

「そういう問題じゃねーよ！！だいたい答え言っちゃったら意味ねえじゃねーか！！！！」

怒鳴る土方をお構い無しに沖田は検査を始める。土方はこれ以上は無駄だと判断し、仕方なく答える。

沖田も飽きたのか、今度は普通にしている。

「これはどうですかイ？」

「右か？」

「正解でさあ。次でラスト、難問ですぜ」

難問の視力検査ってなんだよ。と思いつつ、よづやく悪夢も終わるとホッと胸を撫で下ろす土方。

「これは？」

沖田が指していたのは黒板……ではなく

あの武蔵っぽいおじさんだった。

「誰エエエエエエ！！！！！！！؟؟?」

土方はその場で絶叫。

「土方さん、俺の視力検査をなめちゃあいけませんぜ？」

「もはや視力検査でもねーよ！！！！！！だいたいいつから居たの！？さつきまで居なかったよね！！？」

「残念だなあ土方さん。この問題がわかんねーんなら左目はCでさア」

「そんな問題わかる奴いるかアアア！！！！つーか正解は何なんだよ！総悟！！！」

土方は沖田に答えを聞いたがあっさりとスルーされてしまう。

「先生、土方くんの検査終わりました。右A左Cでさア」

「人の話を聞けエエエ！！！」

「ごくろーさん。おいおいマヨ方、いつまで立ってんだよ。さっさと座れ」

「……………」

ドSコンビを睨み付けながら、必死に怒りを抑えつける。

そんな土方の肩に優しく手がおかれた。

ハッと土方が振り替えると、眼鏡の奥の武蔵みたいな瞳と目が合った。



「…飲むか？」

差し出されたカップ酒を見て土方は黙って首を振った。

第3検査 土方十四郎（後書き）

…なにこのオチ？

自分でもよくわからない（ ）

次回はなるべく早めに更新したいです。

感想等お願いします！

#### 第4検査 山崎退（前書き）

どうも、小豆です。

活動報告を読んでくれた方はわかると思いますが、私は今テストに追われています。

え、ナニ？余裕なの？って思いますか？

ちがいますよorz

今は車で移動中なので更新した訳でして…

精神的には汗だらだらです。

世界史ヤベーヨ…

ここで一言。

テスト？なにそれおいしいの？？＼(^O^)/

ってことで第五話をどうぞ！！

#### 第4検査 山崎退

「よし、山崎。次はお前が行け」

「ええっ！！お、俺ですか？」

「そつだよ。待ってる、今消毒を…」

土方は”黒いしゃもじみたいなアレ”にニユルリとマヨネーズをか  
けた。

「どんな消毒ウウウ！？」

「あ？何言つてやがる。消毒といったらマヨに決まってるんだろ」

「決まってるねーよ！！そんな目につけたらよけい目エ悪くなるわ  
！！！！」

山崎は銀八にかえを頼んだ。

「代えなんてねーよ、我慢してそれ使え。大丈夫だよ、マヨネーズ  
は目にいいってよく言っじやん」

「どこの迷信！！？せめてブルーベリーにしろ！！」

山崎は仕方なくマヨネーズをティッシュで拭き取り、水洗いをして  
今度はきちんと消毒をした。

「山崎さん、大丈夫ですか？」

途中で新八が苦笑いでこんなことを聞いてきた。

「はは、困ったもんだよ。うちのバカ共には…」

山崎も苦笑いで答えたが、この後彼はもっと苦労することになるのだった。

右目の検査は無事に終わった。

「1・0か、お前目良いな。地味に」

「地味には余計です！」

そんなやりとりを終え、山崎は右目を隠して黒板を見た。

「はい、これはー？」

銀八が指したそれは、文字でもなくCでもない、何かのシルエットだった。

「え…び、ピ チユウ…ですか？」

「おっやるな。じゃあこれは？」

「み、ミユ…？？」

「正解！…これはどうだ？」

銀八が指したのは” ” こんなやつ。

「…いや、何それ？」

「何それって、わかんねーの？じゃあヒントな、赤と白のツートンカラーだ」

「…知らねーよ」

「しょうがねーな、二択にしてやるよ。ビ リダマかマル インどーっちだ！！」

「どーっちだ！！じゃねエエ！両方全部の条件満たしてるだろうがアアア！！！！」

とうとう山崎はつつこんだ。

「正解はマル インだ。惜しかったな、山崎。あと1問でポ モン博士になれたのに…」

「先生！！！！俺正解しました！ポ モン博士になれますか！！？」

マル インと書かれたボードを持って近藤が立ち上がった。

「オメーは黙ってるよ！！！つーか何これ？？何で途中から”ポ モンわかるかな？”みたいになってんの？視力検査じゃねーの！？」

「まあまあザキ、そう取り乱すな。またポ モン博士を目指せばいいじゃないか」

近藤はそつと山崎の肩に手を置いた。

「だからゴリラ博士は黙ってる！！いらねーよそんな称号！」

「ゴリラ博士！？違う！！強いて言うならお妙さん博士と呼んでくれ！！！」

「どつちでもいいわ！！！」

山崎がつつこんだ瞬間、どこからか英和辞書が飛んできて近藤の額にクリティカルヒットした。

「ぐああっ！！！」

「委員長オオ！」

「ごめんなさい。手が滑っちゃったわ」

辞書を拾いに来たのは妙だ。

「よかった。ケガした人はいないみたいね」

人の部分を強調して妙は言つと席に着いた。

「……………（お、おっかねー）」

クラスの全員がそう思っただろう。

#### 第4検査 山崎退（後書き）

ぐたぐたでしたね。

まあいつものところです。

世界史なんて嫌いですorz日本史がいい）

感想、小豆への応援お待ちしています！！  
活動報告もよろしくです。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1084/>

---

視力検査だよ!!全員集合オオ!!!

2010年12月10日21時56分発行